

アイデンティティ発達と社会的比較の関連

石崎 和也

問題と目的

Erikson (1959) によるとアイデンティティとは、個人が自己の内部に斉一性と連続性を感じられることと、他者がそれを認めてくれることの両方の事実の自覚である。アイデンティティ形成とは、自分の欲求や関心を認識し表現しながら、重要な他者の期待、欲求、意見を内面化する過程であると言える。これを達成するために、青年は、自己と他者間の相互作用を通じて、自己と他者の見解の不一致を解決しようとする (Sugimura, 2007)。

本研究では、他者の視点を取り込む方法の1つとして社会的比較に着目する。社会的比較は自分と他者とを比較することと定義され (高田, 2011)、能力比較と意見比較に分けることができる。能力とは、自分の生活している環境の中で自分にできることであり、意見とは、その環境についての様々な判断である (高田, 2011)。

アイデンティティと社会的比較は、他者からの情報に関連するという共通点があるが、30–40代を対象に行った研究では、有意な関連が見られなかった (Gyberg & Frisen, 2017)。しかし、アイデンティティ形成と社会的比較の両方を積極的に行う青年期や新興成人 (emerging adults) を対象にした場合には、異なる結果が得られる可能性がある。また、アイデンティティと SNS を用いた社会的比較の関連を検討した研究では、能力比較はアイデンティティにネガティブに関連し、意見比較ではポジティブに関連することが分かった (e.g., Noon et al., 2021)。しかし、アイデンティティの不適應的な探求やアイデンティティ・ステータスとの関連は検討されていない。能力比較および意見比較とアイデンティティとの関連を検討することは、アイデンティティ発達において他者の視点をどのように取り込むのかを理解するために重要である。

そこで本研究では、アイデンティティ・プロセスの5次元 (Luyckx et al., 2008) と社会的比較の能力比較および意見比較との関連を検討する。また、アイデンティティ・ステータスとの関連も検討する。アイデンティティ・プロセスの5次元は、2つのコミットメント次元 (コミットメント : CM とコミットメントとの同一化 : IC) と2つの適応

的な探求次元 (広い探求 : EB と深い探求 : ED)、不適應的な探求である反芻的探求 (RE) で構成される。また、これらの5次元を組み合わせ、アイデンティティ・ステータスの検討もできる。先行研究から (中間他, 2015)、アイデンティティ・ステータスには、達成 (A)、早期完了 (F)、探索モラトリアム (SM)、拡散型拡散 (DD) と無問題化型拡散 (CD) がみられるとされている。

仮説は以下の通りである。能力比較との関連について、コミットメント次元は負の相関を、適応的な探求次元と不適應的な探求次元は正の相関を示すと予測する。また、意見比較との関連について、コミットメント次元と適応的な探求次元は正の相関を、不適應的な探求次元とは負の相関を示すと予測する。アイデンティティ・ステータスに関して、DD と CD は A と F、SM より能力比較で高い得点を示し、A と F、SM は DD と CD より意見比較で高い得点を示すと予測する。

方法

参加者

クラウドソーシング会社を通して18–29歳の若者に対するオンライン調査を行った。参加者539名のうち、回答に不備のあった者を除く518名 (男性279名、女性236名、その他3名) を分析した。平均年齢は24.69歳 ($SD=3.31$) であった。

調査内容

アイデンティティの5次元 中間他 (2015) の DIDS-J (Dimension of Identity Development Scale: the Japanese version) を用いた。CM と IC、EB、ED、RE の5つの下位尺度からなり、各5項目の25項目で構成されている。回答は5件法で求めた。

社会的比較志向性尺度 外山 (2002) の社会的比較志向性尺度を用いた。能力、意見比較の2つの下位尺度からなり、能力が7項目、意見が3項目、下位尺度に含めない1つの項目を合わせた計11項目で構成されている。回答は5件法で求めた。

結果

探索的因子分析

社会的比較志向性尺度は、原版である Iowa Netherland Comparison Orientation Measure (Gibbons & Buunk, 1999) と部分的に因子構造が異なるため、

探索的因子分析 (最尤法, プロマックス回転) を用いた。その結果, 能力比較を7項目, 意見比較を4項目として以降の分析を行った。

アイデンティティ・プロセスと社会的比較

アイデンティティ・プロセスの5次元と社会的比較の能力比較と意見比較の関連を, パス解析によって検討した (Figure 1)。項目数が多いため, 小包化の手法を用いた (清水・山本, 2007)。モデルの適合度は, $\chi^2(168)=502.33$, CFI=.94, RMSEA=.06, AIC=628.33 で十分であった。

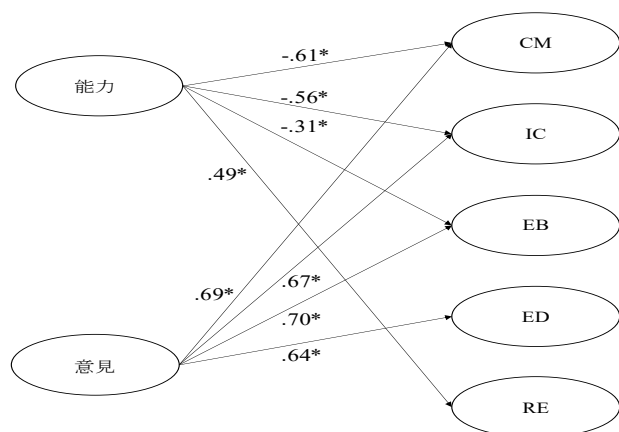


Figure 1. アイデンティティ・プロセスと社会的比較の関連
注) アイデンティティ・プロセスと社会的比較に関連がみられなかったパスと観測変数, 誤差項は省略した。表記のパス係数は標準偏回帰係数。* $p < .01$

アイデンティティ・ステイタスと社会的比較

中間他 (2015) を参考に, 5つの下位尺度得点を用いて, 階層的クラスター分析 (Ward法, 平方ユークリッド距離) を行った。その結果, 中間他と同様に A (30名, 5.8%), F (102名, 19.7%), SM (224名, 43.2%), DD (121名, 23.4%), CD (41名, 7.9%) の5クラスターが抽出された。

各アイデンティティ・ステイタスにおける社会的比較の得点を分散分析によって検討したところ, 能力比較 ($F(4, 513) = 13.817, p < .01$; 偏 $\eta^2 = .097$) と意見比較 ($F(4, 513) = 20.929, p < .01$; 偏 $\eta^2 = .140$) の両方で, アイデンティティ・ステイタスの主効果が有意であった。Holm法による多重比較の結果 (Table 1), 能力比較の得点については, SMとDDがF, A, CDより高かった。また, 意見比較の得点については, SMが最も高く, SM, A, DDがFおよびCDより高く, CDが最も低かった。

考察

アイデンティティ・プロセスと能力比較

能力比較との関連について, コミットメント次元は負の相関を, 適応的な探求次元と不適応的な

探求次元は正の相関を示すと予測した。結果は, コミットメント次元と広い探求は負の相関を, 不適応的な探求次元とは正の相関を示し, 仮説は部分的に支持された。深い探求では結果が有意ではなかった。広い探求と能力比較は負の相関を示し, 仮説と異なる結果となった。この理由として, 広い探求はコミットメントが形成されていない, または再考している状況で行われる探求のため, 否定的な感情を経験する可能性がある能力比較を避けていたことが考えられる。

アイデンティティ・プロセスと意見比較

意見比較との関連について, コミットメント次元と適応的な探求次元は正の相関を, 不適応的な探求次元とは負の相関を示すと予測した。結果は, コミットメント次元と適応的な探求次元とは正の相関を示し, 仮説は部分的に支持された。不適応的な探求次元とは結果が有意ではなかった。この理由として, 意見比較によってポジティブな心理状態になったとしても, アイデンティティ形成によって否定的な感情を経験する場合があります, 自己反芻的思考に陥ってしまう可能性が考えられる。

アイデンティティ・ステイタスと社会的比較

DDとCDはAとF, SMより能力比較で高い得点を示し, AとF, SMはDDとCDより意見比較で高い得点を示すと予測した。結果は, SMとDDが積極的に能力比較を行い, Aと, SM, DDが積極的に意見比較を行っており, 仮説は部分的に支持された。このことからコミットメントを形成した上で比較を行う場合には, 能力比較を行うこともあるが, 反芻的探求も高くなることが考えられる。コミットメント形成をしていない場合の能力比較は, 探求を高めるが反芻的探求も高める可能性が考えられる。また, コミットメントに関わらず, 探索を行うときには, 意見比較を積極的に行う可能性が考えられる。

Table 1

DIDS-Jのクラスターによる能力・意見比較の得点差					
	1. A	2. F	3. SM	4. DD	5. CD
能力	2.78 (0.94)	2.94 (0.69)	3.45 (0.80)	3.50 (0.84)	2.98 (0.80)
意見	3.77 (1.07)	3.26 (0.69)	3.86 (0.72)	3.55 (0.84)	2.84 (0.92)

注) 数値は平均値, 括弧内の数値は標準偏差である。

(指導教員: 杉村 和美)